

わが愛する歌

— 名歌鑑賞 —

二反田 實

あゝその日男の子に惜しき額やとあげならはしゝ髪なでにきな

折口 信夫

全集の「短歌拾遺」の初めの方に採録の一首であり明治三十八年十九歳の時に詠まれたとあります。日露戦争終了の年で、その翌年には藤村の「破壊」・漱石の「坊ちゃん」が発表されています。二〇世紀に入り六年目でした。

「太陽の舟短歌会」に加入がゆるされてすぐに、折口先生の全集を少し見た中で、目に飛込んで来た一首であり、これを読んで後そのあと頁を見ることがをやめてしまいました。日本を取巻く時代背景の中で、この甘く切なく、ロマンとナルシズムと「世間」に背をむけたような「静かさ」は、なんなのでしょうか。歌人の持つ「永遠性」とでも言わなければならない様な、作者一九歳の時にさらに幼い「時・あゝその日」を思い出している歌かと思いますが、二度と帰る事の出来ない「あゝその日」でもあると思うと、私の目は湖となるのです。

「折口（敬称略）」と芥川・三島・堀などのロマンチズムとナルシズムの違いがあるのかないのかを「何の為に」とは考えずに、浅学の私が考えても、やはり詩人のそれと非詩人のそれとの違いを感じるのです。明治三五年死去の子規とも漱石・藤村の詩情とも。額の痣は作者の魂としてあゝその日という初句の五文字の中に人格の永遠としてとじこめられているように思われるのです。

卷頭言

昭和六十三年一月の創刊号（通巻五十六号）から編集人を引き受け、二月号より、巻頭言を担当した。以来、ある一時期と、ナイルを融合した一年七ヶ月を除いては平成の時代を書き継いで来た。平成ももう二十二年を数える。思えば長い年月だった。一番下の娘はその時四歳、もう二十六歳になる。私の娘が成長したように、果して太陽の舟短歌会は成長したのであるか。あまりに身近すぎて私と、あるいはもう身体の一部になっていて、私にはその成長が分からぬらしい。

阿部先生は何を書いても何一つ批評らしい事はおっしゃらなかった。時折、冗談めかしく「君の巻頭言は格調高いね」とおっしゃる。それが何よりの力であり恐怖だった。しかしそうおっしゃって下さる先生を失ってはや九年、無我夢中の毎月だった。今思い返しても何も浮かん来ず、目の前に毎月の雑誌が積まれているだけ。幸いに六年前に松岡さんが編集を引き受けて下さった。大きな荷物を一つ下す事が出来た。私が巻頭言を続けて来れたのも、松岡さんが編集を引き受けて下さったから。そして来月から、この巻頭言を松岡編集長が受け持つて下さる事と成った。なぜもっと早くに引き渡さなかったのだらうと、自分の迂闊さに愕然とする。松岡編集長は、私などより遙かに学識も高く人生経験も豊かな方。これから太陽の舟短歌会が進む方向に巨大な燈台となって豊かな灯かりを灯し、私達を導いてくれるに違いない。私は今からそれが楽しみでわくわくしている。最後に長い間私の巻頭言を読んで下さった会員の皆様に衷心よりお礼申し上げて筆を置く事とする。

（高嶋）

太陽の舟 目次

三十二巻 二月号（通巻三〇二号）

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

巻頭言

高嶋 邦彦

二十五首詠

山田 紀子

阿部正路論（第一〇〇回）

須藤 宏明

歌誌散見（第七十六回）

豊泉 豪

作品Ⅰ

梶川喜與志 他

十二月批評（作品Ⅰ）

吉岡悠紀子

合 評（作品Ⅱ）

山本 賀子

選者十首

角田 順子・土方 澄江

秀歌拔芳（三〇〇号）

酒向 一次・渡辺 幸子

作品Ⅱ

高嶋 邦彦

太陽の舟短歌会組織図

深谷 充代 他

文法講座（十四）

奥田 清

歌帖余白座（七十四）

松岡 三夫

作歌の目・作歌の技法（第六十一回）

三木 勝

歌会・支部報告 他

山田（紀）・照山・松岡

平成20年会計報告書

阿部正路

編集後記

表紙……イラスト 阿部正冬

山田（紀）・照山・松岡

阿部正路

表紙……イラスト 阿部正冬

阿部正路

表紙……イラスト 阿部正冬

阿部正路

表紙……イラスト 阿部正冬

阿部正路

川のある風景

山田紀子

北上の河口にひらける石巻いしのまき漁港の町とその名は高し

松島を誉めたたへたる芭蕉翁わが故郷を悪しく書きをく

沈丁の小花を糸に連ねゆき幼の胸に掛けくれし母

幼なには重き裏門細くあけ河岸に舫へる漁船見し春

漁おへて港に舫ふ船ぶねは夜には早きランタンともす

川波にゆれつつ流れる灯籠を見守るごとく月はのぼり来

用済みと言へど大桶たが箍ふとく古武士のやうな風格のあり

六尺の大桶ならぶ味噌蔵も北上川も望郷に棲む

成田から飛び立つ機窓に夕映えの利根川ひかる金襴の帯

大陸を走る夜汽車の隅に聴く黄河を渡る鉄橋の音

邱山^{ほうざん}をすぎて黄河の岸に着く吾の靴先を濡らす黄の水

あきらめは罪悪ですか。つぶやきに黄のさざ波は寄せ返すのみ

劫初^{ていしよ}より黄砂ふる国不老不死を願ひし男の陵をけぶらす

殉死といふ数多の奴隸の屍は殷虚^{いんきよ}の闇を見据ゑてゐたり

洹河^{えんがわ}のしずかな水音はレクイエム殷の奴隸の死を悼む如

絵のやうな甲骨文字の「虹」ありて四千年前の虹と思ひき

阿部師より教えられたる「妣^{はは}」の字が甲骨文字にありて驚く

四千年前の「妣」の字紙に書くなんども書けば吾が妣の顔

仮借なき日照りの続く山西省の水無し川をいくたびも越す

寺めぐり京都の雨の冷たさに加茂川沿ひの茶房に座る

ビニールの傘のしずくに濡れながら六道の辻に道迷ひをり

好色の清盛入道の薄笑ひ六波羅密寺に彫られてゐたり

帰ることかなはぬ生家の側ちかく流れる川の四季を恋しむ

北上の水に育ちし夫とわれ今スーパ―の水を買ひをり

散策の利根川土手に春を聞く軽き水音と高啼くひばり

阿部正路論（第百回）

阿部正路論

須藤 宏 明

―瞬間が作る文学史―

道端の花、路傍の石を常に視野に据えておくことは、歌を作る心の基盤であるが、この精神は研究にも必需である。重箱の隅という空間が、重箱全体の空間を支えている。中心は周縁によって形作られる。文学史の流れも、防人、流人、漂泊者たちの一瞬の生の証し、つまり彼らが表現した文学によって成立している。だからこそ、埋もれてしまいがちな存在に焦点をあて、実証的な研究必要となる。学問に対する、この研究方法を、阿部正路は実践し、貫き通した。阿部は、円空の歌集『袈裟百首』にある、

けさの山花の鏡となる水をちりかゝるをや雲といふらん
という歌をとりあげて、

まさに、ただ落下落葉の人生を送ったの山中の、漂白隠遁の人の中にも、和歌文学発生史の原点を見失いたくないと思うである。（『和歌文学発生史論』楓桜社・昭和五十二年・九頁）

と、路傍の花的な存在に対する注目の重要性を説いている。円空のこの歌は『古今和歌集』巻第一の春歌上に所収の伊勢の歌「年をへて花のかぐみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ」を踏まえている。初句の「年をへて」を円空は「けさの山」としただけの平凡な歌という評価もあるかもしれない。しかし、阿部は「伊勢の歌を一步も出るものではないが、」と言いつつ、初句が「けさの山」でならないからこそ『袈裟百首』の特色というべきであろう。

と、最初の五文字の変換を重視している。何故、「けさの山」が特色であるのか。それはどのような特色なのか。もとの歌の「年をへて」を鑑みると「今朝の山」という意味であろう。古今集は長い時間の経過の中での花や水という対象を見ているのに対し、円空は今朝という瞬間の中で対象を捉えている。この違いは、大きい。優雅幽玄と刹那という問題にもつながる。こう考えると「けさの山」は「袈裟の山」をも意味しているのであろう。瞬間の表情を捉えた仏像を彫り続けた円空にとって、袈裟は瞬間刹那の問題であると考えられる。

毎日の風景の中で、今朝という瞬間の視点で対象物を見ること、これが阿部の言う和歌文学の発生、及び、文学史の原点なのではないだろうか。確かに、我々は伝統の積み重ね、歴史のコンテクストによって存在している。しかし、我々自身の今を生きるこの一瞬が、伝統と歴史のコンテクストを形作っていることを自覚せねばならない。我々の作る歌が文学史を形作るということだ。阿部の説く文学史は、この瞬間性を重視していることに、その特色がある。

歌誌散見 第七十五回

豊 泉 豪

「韻」③

前号に続き、十一号（〇九年九月）より作品を鑑賞する。

・橋の下の暗闇やぶる鳥の声破れた闇のその中も闇

菊池 陽子

鳥は異界からの使いであり、橋は異界との境界をなす。古来、たそかれ時に橋のほとりに立ち、聞こえてくる言葉によって吉凶を占う橋占はしうらという占いがあった。橋の下は妖怪小豆研ぎや、陰陽師安倍晴明の使う式神が潜む妖しい場所でもある。時代を今に移しても、そこには人間社会の歪みが溜まり、底知れぬ暗闇が広がっているようである。

・暮れ早き山のふもとの蕎麦畑花しろじろと束の間残る

柏谷作三郎

蕎麦の花は初秋、九月頃に咲く。「束の間」の幻想的な風景を捉えているが、初句と結句との関係が、あるいは第四句の表現も説明的かもしれない。余談だが蕎麦の花も「盛り」と言うとき「番茶も出花」と同じ意味で、つまり蕎麦の花はパツとしなないものを意味するそうだ。白く花をつけた蕎麦畑は、今日では美しい風景として捉えられるのが一般的だろう。

・窓口の向こうに坐る女の髪白きを交う住み古りしかな

（郵便局にて） 沼倉裕子

交うは他動詞で、〈まぜ合わせる〉の意である。（歳月が）女の髪に白いもの〓白髪を交ぜた、という意味になるだろう。黒髪に霜が降り、つまり髪が白くなることで時間の経過を表すのは古代から歌の常道であるが、この作では時の移ろいが嘆かれているのではない。住みなれた町とそこに住む人々への作者の共感、温かいまなざしが感じられる一首である。

・喧騒のかすか届きてふらこは春を寂しき音に揺れおり

相良 峻

かすかに聞こえる遠くの喧騒が、かえって静けさや寂しさを際立たせる。ふらここ〓ぶらんこは俳句では春の季語で、それは子どもたちが冬から解き放たれたように一斉にぶらんこをこぐ様からきているのだろうが、軋んだ音をたてながら揺れるさびしさもまた、春に似つかわしい。第二句は「かすかに」でよいのではないだろうか。

・桑の実の鈴生り見上ぐ婆ばあばになつても消せない記憶がひとつ

福岡 勢子

最初「婆」のルビを「ばばあ」と読み違え、自虐的な歌かと思つたが、「ばあば」であつた。傍らに孫の存在が浮かぶことで、時間的にも空間的にも歌に広がりが出た。桑は蚕の餌として養蚕に欠かせないので、その実は人間の食用にもなる。三木露風の童謡「赤とんぼ」にも歌われるように、桑のある風景は近代日本の原風景とも言えるだろう。

「韻」は、決して派手さはないが、メンバーそれぞれの個性が感じられる同人誌である。

（「韻」の項、了）

十二月批評（作品Ⅰ）

吉岡悠紀子

・道の辺にコスモス踊る好天気いざゆかめやも 孫の運動会

奥田 清

〈いざゆかめやも〉を違和感なく読み込まれているのはさすが奥田先生と感心しました。コスモス踊るの表現に作者の喜びを感じます。毎号文法講座を書いて頂き有り難うございます。私には文法をわきまえて詠むことはむづかしい課題ですが一生懸命学ばせて頂きます。

・病む妻に木犀の香を伝へむと障子を繰りて部屋に香を呼ぶ

木村 重夫

奥様を思われる優しさが出ていてじーんと来ます。病気の奥様は大変と思いますが心のあたたかい御主人が側に居られるので幸せと思います。御全快をお祈りします。

・新潟の新米ことしも賜はりき稲穂二本も供に添へらる

久保田昭江

作者はおだやかなお人柄です。あたたかい御家族・御親戚に囲まれて居られます。新潟・稲穂二本の具体がよいと思います。

・はるかなる西方の風や盃蘭盆会秋冷ふくみ祖母の声聴く

佐伯 朋子

静かで心の澄まれた作者のお人柄が滲み出ています。静かに祖母様の思い出に過ぎたことと思います。

・無為に刻過こせる今日も午前二時「早く寝よ」との亡夫の
声する 志賀 倭子

どうしてどうして無為には過しては居られないのに謙虚な方です。亡き御主人を思われる気持も伝わってきます。

・訳も無くウキウキしているこんな日は空は水色海も水色

杉本 和子

明るい気持のよい作品です。読ませて頂いている私までウキウキした明るい気持になりました。

・藁を編み冬の風物なによりと庭木に冠せ雪積む日待つ

外箴よし枝

大変な雪を嫌と思わずそれどころか雪積む日の美しさを待つて居られる心の豊かさがうかがえます。私は北陸（上越市）に十年位住んでいました。屋根の雪おろし、がんじきでの雪踏みなど嫌な思い出のみで雪の美しさを愛でる心はありませんでした。

・お風呂場のすみに一匹鳴くちろひとりのわれに逢ひに来た娘か 鶴来けい子

小さい一匹のこおろぎにも心動かされる作者の豊かな心を感じました。

・析の実五つ拾ひて山住みを慰むらむかその濃き茶の色

梶野 路

自然を愛して居られる豊かな心が伝わってきます。数詞を読み込むのはむづかしいと聞いていますが〈五つ拾ひて〉の具体が生きていると思います。

十二月批評（作品Ⅱ）

山本 賀子

・十六夜の月渡りゆく空冴へて語れば直ぐなる月のまなざし

中村 陽子

作者は優しい月の光に包まれて、心の安らぎを覚えながら月に語りかけます。人の世の哀楽を納めて悠揚迫らざる自然の力を感じさせる美しい一首です。

・遣はざる介護保険料ただ払ふ幸とも不平とも妻ともども

長須 正文

使わない割に金額が高む介護保険料への思いに共感し、そのユーモラスな表現が微笑ましい。奥様共々保険を使わぬ健康こそ一番の倖せ、お元気で「太陽の舟」お導き下さい。

・幼き日健康優良児表彰と夫の挨拶言葉詰まりて

土方 澄江

回復に向かわれていたお義姉様の突然の訃報、心の準備も儘ならぬ告別式でのご挨拶。結句の「言葉詰まりて」に夫の悲しみの深さや、作者の氣遣いが余韻として心を打ちます。

・居ながらにボタン一つの情報源、一つだけ出ぬ決別の刻

宮島マツエ

人間に解らないことはないと言う現代の傲りの中で、死について考える時、人それぞれの哲学や宗教心が生まれるのではないのでしょうか。読点で結句の重みと作者の誠実さが伺われます。「決」は「訣」が普通に使われるようですが。

・心こめ拙いけれども詠みゆかな人の情けの優しさにふれ

山田 玲子

短歌を詠む動機の一つとして、いろいろな形の「情け」や「優しさ」に触れて、自分も磨かれ、元氣が出ます。その体験は勿論、作者のお人柄に依るのは言うまでもありません。

・足音も吐息も吾がもの静かなる至福の時の過ぐるは速し

山名 恒子

美術館を巡れば、全く作者と同様の感慨に耽り、充たされて、時の過ぎるのも忘れてしまいます。しかし、その気持ちをおのうに表現することは徒ならず、よく勉強されている作者ならではのもの。「さすが！」と脱帽致しました。

・職退きて二年も経てばかり来る電話にあわて返事をどめる

生稲 進

心血を注いで勤められた男性の職場と家庭の日常ではまるで次元の異なる世界。退職後二年と言われる長閑やかなご家庭がほの見え、作者の正直な戸惑いに優しく鋭い感性が感じられます。

・残照に遠き山並黒く見え波立つ心静もりてゆく

井上萬里子

残照が、遙かの山並を黒い陰にして暮れてゆきます。雄大な自然の営みに向き合えば、人間存在の小さいこと、人の世の細かいことは、大気の中にすべて溶け込んでしまうのを覚えます。作者の心の動揺もいっしか「静もりてゆく」有難さがあります。しみじみとした感動を呼ぶ一首です。

合評

座談会

司会 今月は昨年の十二月号から四首を選んで合評を行います。一首目は、岐阜支部の木村恵美子会員の

さくら草のこぼれ種の苗ひろひをりまた来む春のうららを
恋ひつ です。如何でしょうか。

I 木枯らしの吹き始めるころ、とても小さい桜草の芽葉が
思いもかけない場所に見つかり、びっくりすることがありま
すね。けし粒ほどの種がこぼれたのでしょう。その苗を拾っ
て植えてもうまく育たないことが多いのですが、たまたまう
まく根づいて育ち、春になって花まで咲くならばそれは嬉し
いものです。その春を待つ、わくわくする感じがよく表現さ
れています。「苗をひろう」という言い方が桜草にはびつた
りとあてはまります。

S 私は、こぼれ種から生えた苗を移しをり、ならわかるの
ですが、「苗をひろう」のはどうかと思いました。それから
結句の「恋ひつ」は「恋ひつつ」の方が良いと思います。

Y 苗をそっと抜いているので、ひろう、と表現したのでは
ないかしら。

T そうとも取れますが、この歌の場合、苗を植えかえるた
めに抜いているのか、あるいは、間引きのために抜いている
のかわからない。移植なら「移しをり」にし、間引きなら、
「間引きせり」と丁寧に表現したほうが良いのでは。それから、
結句は「を」を取って「うらら恋ひつつ」でしょうね。

司会 では、次は柏支部の末次房江会員の

わづか弧をなして展がる水平線 船首に青に染まること仲

つ です。どなたからでもどうぞ。

I これ一首ですと、歌のどこにも旅であるとは直接詠まれ
ていませんが、不思議と船旅の雰囲気がよくわかります。そ
れはおそらく「弧をなす水平線」「船首」「青」というぎり
ぎりに切り詰められた表現で歌がつくられているからでしょ
う。圧倒されます。うまい歌です。

S 私は四句目の「に」の重なりが気になりましたね。

Y それなら、語順を変えて、「船首に佇ちて青に染まれる」
にしてみてはどうでしょう。

S そうですね。「青に染まる」とあるので「青」は「藍」
の字を使った方が良いと思う。それから「わづか」と「展が
る」は反対のような気がします。作者の七首を読んでみると
釜山港へ向っているらしいので、「釜山港」という地名を入
れてみてはどうでしょう。

Y 作者は船に乗っているわけだから、海の上だと思うので
上句はこれで良いと思う。

T 「わづか弧をなして展がる」のは作者の発見だから、上
句はこのまま生かしたい。ただ、下句が平凡すぎてつまらな
いのです。全面的に変えたいですね。比喻の「ごと」も生き
ていないです。

Y 「青に染まる」ということは、海に溶け込んでいくとい
うことだから、そこを表現してほしいですね。

T そうです。ほしいのは海と一体になった作者の客観描写
あるいは感動です。

司会 三首目は、千葉支部の原田寛会員の

ザリガニの触角見える他人をもう振り返るまい夜のふかま
りを取り上げます。如何でしょうか。

S Y 解りづらいけどなんとなく魅力的な気になる歌ですね。私もすぐには解らなくて、一字あけの部分から考えてみました。ザリガニの生態をよく知りませんが、触角で感知するのでしょうか。でも、人間は触角を持たないので、この歌の解釈は難しいです。

I この歌は上句と下句に分かれます。それぞれがまったく関係ない独立したメッセージです。これらを並置すると何かが生まれる、それぞれが持っているものではない何かが生じるのです。

T この歌はすべて抽象概念で、具体はありませんが、ザリガニの触角に、いつも他人の様子を窺い気にしている自己を仮託し、それにはもう疲れた、もう振り返らない、という作者の決意を詠んだものと受け取れます。

I まるで化学の実験みたいですね。ただ違うのは、何が生じるのか、あるいは生じないのか作者にもわかっていないということです。おそらく正解はないのでしょう。

S デリケートな歌ですね。作者はザリガニの生態をよく見ていて、自分は人との比較で生きるまい、という覚悟が見えるような歌ですね。結句の「夜のふかまり」はどうですか。

T これは雰囲気を出すための時間設定で、そんなに深い意味はないです。

S 「ザリガニの触角」はいいですね。

T 表現として「ザリガニの触角」上手いです。作者独特の感性ですね。

司会 四首目は、品川支部の松本啓子会員の

老いてより汗涙唾のさかんなり今しばらくは潤ほひくれましです。如何でしょうか。

S 「汗涙唾」は読みづらいですね。かんるいだ、と読んでしまいました。

T ここはちょっと調子が悪いので、仮名をふるか句読点を入れて、「汗、涙、唾の」とした方がいいです。

I この歌は体験がないと、そんなもんですか、と云うだけでおわってしまう恐れがありますね。身体や病気についての歌にはそんな傾向がみられます。

S 歳を取ると、だんだん乾いてくるのが普通なのに、作者は老いてますます元気な様子ですね。

I この歌は、単なる身体の記述のようなものではないでしょう。おそらく生理には汗、涙、唾液は潤いとは全く関係ない独立した生理機能があって、作者にとっても食べるとき、唾液がよくでるということだけが、はっきりわかるのですが、それは潤いとして汗にも、涙にもあてはめるというブラックユーモアの意識が見られうれしい歌です。

Y 歳を取ったら、目汁鼻汁といいますよね。私も人情に関係なく涙が出るんですけど、この歌では、作者はもうしばらくこのまま潤いをいただきたいものだなあ、と願われる気持ちがよくでていますね。

T そうですね。「くれまし」は願望をあらわしているので「下さい、欲しい」という意味です。

S 「潤ほひ欲し」ではどうでしょうか。

T この歌は作者の前向きな生き様が詠まれていて、このまま評価したいですね。

司会 本日はこれで終わります。今回はうまい歌、いい歌、個性的な歌、考えた歌の評となりました。ありがとうございました。

(記録・山田紀子)

選者 角田 順子

☆目覚むればすなはち主婦の稼働時間これが〈青い鳥〉かも
しれぬ 川村 貴美

神のみぞ知るらむわれの明日の色何色なるかと夢みて眠る

黒羽 紘子

「年寄は口出すまい」と言ふくせに説教を好む年寄り多し

小貫 昭

妻なくば折れしとぞ思ふ三十余年幾星霜の巡る小宇宙

高崎 邦彦

さしのべし夫と手と手をつなぎたり老いて柔かくなりたる

てのひら 月田 藤枝

わが旅は今どの辺り山茶花の蒼日毎に数増しゆきぬ

土屋 道子

お風呂場のすみに一匹鳴くちろひとりわれに逢ひに来

た娘か 鶴来けい子

自然とは輪廻転生の四季がある都会の姿は貼り絵のようだ

森田 勝昭

シルバーデー行かねば損と出かけ行くトリノ・エジプト展

都美術館へ 吉岡悠紀子

アメリカの大学へ留学 よく学び遂に受けたるドクターの

栄 渥美 崇子

選者 土方 澄江

たっぷりと身の透けるほど深呼吸朝陽のにおい稲穂の香り

上田やい子

ど忘れの人の名前の遠ざかる秋風の吹くススキの原に

岡部千代松

こころ奇ち歩める吾にあはあはとつきて離れぬ昼の月あり

木村百合子

姪っ子の父が司会の披露宴汗が涙を隠す淋しさ

杉山 直子

独居^{ひとり}にて誰に電話かけやらむ雪降りてなほ人の恋しき

外箴よし枝

過ぎ来しの茶箱のセーターバサリと過去の整理吾の終章

手塚ミツエ

☆太陽のひっそり沈む秋の暮浄土ゆめ見つ老い一人立つ

吉田 昌夫

喪失の感慨多き老いの身に尚面白き国の替はり目

山本 賀子

生きるため明るさ振り撒くこの仮面もう外したいピエロは

卒業 浅見 時子

無造作に過ぎゆく刻を惜しむがにミンミン蟬の声の重たき

岩橋千代子

選者 酒向 一次

さらさらと膚を撫でゆく軽き風コスモス揺らし秋は来にけり

上田 やい子

新米の炊きたてご飯の湯気吹けば香り豊かに艶々の白

梶川 喜與志

新聞を配るバイクの音かすかバイクの音で今日がはじまる

込山 千代

☆般若心経唱へしのに声出さぬひと日独りの窓のたそがれ

志賀 倭子

空襲のなき日は山野を巡りけり友とぐみの実類張り乍ら

高橋 和子

「運転を止めて」と言ふ声小さくなる杖つく夫の日びを思へば

中村 陽子

頭上より缺の音の軽やかにやがて木の間に青空の見ゆ

長須 正文

沈まざる陽を気にしつつ立話夏の日暮れは長すぎるから

福地 啓子

故障無く三十余年を点したる卓上スタンドつひに消へたり

山田 玲子

もう最後と決めつつ旅を計画すヨルダンとう国無事戻れる

浅見 時子

選者 渡辺 幸子

☆目覚むればすはなち主婦の稼働時間これが〈青い鳥〉かもしれぬ

川村 貴美

雲切れて月の光は皓皓と臥すを惜しみて真夜に詩読む

木村 重夫

☆般若心経唱へしのに声出さぬひと日独りの窓のたそがれ

志賀 倭子

五枚の皿二枚に減らす食器棚 よはひ 齢重ねて十月の汗

多久和玲子

共に老い一人が病めば看取りする当然すぎる当然の日々

月田 藤枝

☆太陽のひっそり沈む秋の暮れ浄土ゆめ見つ老い一人立つ

吉田 昌夫

お金出し水を買ってこの時代そのうち空気も買うのだろ

豊島 英明

うか 一斉に携帯向ける人数多振り向く空に 虹でよかった

村田 孝子

二女二男地球の中に散らばひ住めど健やかなるをひたに感謝す

渥美 崇子

ぜんまいのばね几帳面に巻くごとし胡瓜のつるの意志の強

生稲 進

さびしさに耐へて歩みし学の道真淵の杜のしづけさの
徑

三木 勝

それはなにげなく降り立った浜松の街の縣居神社の徑であると言う。旅にはこの様な思いがけない出会いがある。作者は今そんな出会いに自らの人生を重ね合わせて学問をする事の道の険しさを噛み締めている。「縣居」とは真淵の江戸の住居の屋号（「田舎住居」の意）。中央区日本橋浜町の住居跡には「あがた居の茅生の露原かきわけて月見に来つる都人かも」の真淵の和歌を添えた説明書きが立っている。真淵は江戸時代中期、荷田春満に師事し、国学者として大家を成す。荷田春満、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤を国学の四大人と称する。浜松は真淵の故郷。真淵の雅号は、遠江・国敷智からとったと言う。当時の浜松藩主水野忠邦、郷土の国学者高林方朗氏らの尽力により賀茂神社（浜松市東場町）の境内に祭祀されたのが始まりと言う。現在の社殿は一九八四年に再建されたもの。御祭神は、賀茂真淵大人命（かものまぶちうしのみこと）である。「万葉考」「祝詞考」「国学考」「歌意考」「語意考」など、その著書は多岐に渡り、本居宣長の師としても有名。拔芳歌はそんな真淵の事跡を踏まえながら、記念館休館の為森閑とした静けさの饒俅にひたりながら静かに学問の道を歩く作者の自画像でもあろう。

もぎたての胡瓜に金山寺味噌なつかしく想ひ出もろも
る一人のおやつ

江面 伸子

金山寺味噌とは中国の怪山寺きんざんじの製法を伝えたのでこの名があると伝える。和歌山県の湯浅町がその始まりと言う。調理に使わずおかずや酒の肴として食べる。作者はこの味噌にどのような想い出があったのであろうか。しかし、私が心引かれたのは、淋しさや孤独とは違う、一種言い知れぬ豊かな時のたゆたい。作者は一人でないがその心の宇宙は言い知れぬ幸せに満たされていたのではないだろうか。

生き物のいのちを生かす食つくる牛飼人の明るき意気
地

緒方 善丸

「蒜山高原」と題する七首、作者自身も自然農法を実践しているだけに、自然を生かした搾乳業を見詰める目の確かさと感動に満ちた豊かな連作となった。拔芳歌はその掉尾の一首。その前に「良き餌を与へしジャージー牛乳を低温殺菌するはぜいたく」が置かれ、それを受けての結句「明かるき意気地」になっている。食の安全に絶対はない。その事を最も大切にしていて作者と牛飼人の鮮やかな心の共鳴なのであった。

目覚むればすなはち主婦の稼働時間これがへ青い鳥
かもしれぬ

川村 貴美

「青い鳥」とはメーテルリンクの童話。幸福の

前々号 (300 号) 秀歌拔芳

鳥を探して旅するチルチルとミチルは夢の中で様々な国を遍歴するが、目がさめて幸福の鳥は身近に居る事を知る。作者はその寓話を見事なまでに短歌に取り込んだ。色々な夢があったであろう人生。しかし毎日の主婦の仕事の中でその夢も色褪せて行く。だがある時毎日の主婦の仕事の中にこそ真実の幸福があるのかもしれないと気付く。「稼働時間」という乾いた表現も生きています。

火と水と土の力がありやかに豊かに実る稲穂よきかな

杉本 和子

五月号以来の出詠となった。まずそれがとてもうれしい。拔芳歌「ありやか」は難しい概念だが、神の様に目に見えない非実在を実在として知覚する事を言う。中国には五行説があり、万物の構成要素は木火土金水にあるとする。農業を営む者にとって、この自然の力こそが稔み。そしてその力を見抜き感じ感謝することが豊かな実りを約束する。自然と共に生きる作者の心の奥深さが真底私の心に沁み込んだ。

独居^{ひとり}にて誰に電話かけやらむ雪降りてなほ人の恋しき

外筈よし枝

作者は飛騨の人。冬の寒さと雪深さは実感として知っている。「住み慣れし家古きゆへ隙間風四方いづれも入口かと思ふ」も私の冬の実体験だ。拔芳歌、覚悟していても雪に降り込められて気楽

に外出出来ない独り居の寂しさは想像にあまりある。頼りは電話。誰にかけよう。そこにはやさしい遠慮もある。下句の「なほ」には分かっているけれどもどうしようも無い孤独が滲み出て痛い。白露とふ季節のしづくに触れたくて訪ひしひる庭赤とんぼの群れ

谷河 ひさ

「白露」とは、二十四節氣の一つで秋分の十五日前を言い、この頃からようやく秋氣が加わると言われている。大体九月七日頃にあたる。拔芳歌、その秋氣を味わいたい氣分を「季節のしづくに触れたい」と表現して見事。「ひろ庭」は何処か分からない。しかし、囲われて人氣の無い広々とした自然の空間と考えれば作者の悠々迫らざる自然體が見えてほえましく、人よりも小動物が秋を先取りしている實感を讀者も共有させられる。心洗われる秀歌と言えよう。

お風呂場のすみに一匹鳴くちちるひとりのわれに逢ひに來た娘か

鶴來けい子

足が痛くて思う様に動けない作者。一人での立居振舞もままならぬ作者だからこそ、離れ住む娘の会いに來てくれる事が待ち遠しい。おそらく作者の無意識の意識。だから風呂場の片隅にたった一匹鳴くかそけきこおろぎの鳴き声にさえ、娘が会いに來てくれたのかと思う。母と娘の濃密な心の交流に何とも言えぬ暖かいものを感じるのは私

一人ではあるまい。
 栃の実を五つ拾ひて山住みを慰むらむかその濃き茶の色
 梅野 落

栃の実、栃の木に成る実。縄文時代から食べられていた日本人の大切な食材。栗に似ているが、アクが強くてそのままでは食べられない。食生活が豊かになり、先人の工夫は過去の物となり今ではほとんど返り見られない食材となった。作者はそれを五つ拾った。五つは指の数、手一杯と言う意味も籠めて心の充足を得る。それが、濃き茶の色と共に山住みの無聊を慰めているのだと実感する。自然の中に溶け込んでしまいそうな静謐を共有する。

御来光黄金の海に輝きて庭から見れて先祖に感謝

二宮 裕子

大磯支部の歌会に御邪魔した時、作者の家は高台にあって、寝ながらにして富士の御来光が見える。先祖が建ててくれた家なので、とても先祖に感謝しているというお話を伺った。それがそのまま素直に歌になっていて、歌の始まりはこれで良いのだと素直に共感する。私も高山の吟行会の帰り、静岡の日本平ホテルの駐車場から、冠雪した富士山頂の朝焼けに感動し、ホテルの庭園から雄大な富士の絶景を堪能した。

太陽の舟編集の責引き受けし二百二十九号よろよろス

タート
 ある時はあからさまなる怒号浴び失意の底に沈みゆき
 松岡 三夫

松岡会員に編集を引き受けて戴いてもう六年になる。その間どれ程大変で、どれ程苦労なされたか、私も長く編集をして来たので、嫌と言う程分かる。今の太陽の舟短歌会はその時松岡会員が編集長を引き受けて下さらなかったら存在し得たかどうか。たぶん私が潰れていたに違いない。抜芳歌にもある通り、編集長がどれ程防波堤になり私を守って下さったか、思うだけでも私の力の無さが申し訳なく思われる。いつも無理ばかりお願いし、三月号から巻頭言もお願いする事となった。阿部先生が先生の代わりに私に残して下さった大切な宝物と思いながらこうして甘えている。何の歌評にもならないのだが、「二百号入港す」七首、唯唯涙を流して読んだ。

太陽も地球も我も唯一つ未知の世界に満ちる不可思議

宮原喜美子

「夕焼けの一大シヨウの終わる頃光弱まり暮れなずむ湖」から逆算すると、ちょうど太陽がその最後の光芒を放っている頃と考えられる。しかも場所は富士五湖あたり。かつてのダイナミックな地球の躍動の証明が富士山。抜芳歌の様な宇宙まで包括する大きな感動に浸る気持は素直に私の中

前々号 (300 号) 秀歌拔芳

にも入ってくる。「不可思議」は人知では知り得ない事。自分自身を含めた不可思議な宇宙の神秘に触れた作者の幸せを思う。

一斉に携帯向ける人数多振り向く空に 虹で良かった

村田 孝子

現代人は自分で物を見て記憶に留めようとする。すぐに携帯で写真を撮って留めようとする。だから、対象をじっと見て感じる事が不得手だ。そんな意味で現代人はもっと歌や詩や絵を学べば良いと思う。拔芳歌、そんな世相を見事に切り取った。しかも皆同じ事をしないと安心出来ない世相も入れて。更に禍事の多い現代社会、結句の「虹で良かった」が胸を打つ。三つの現代世相が合体した見事な時事詠と言えよう。

自然とは輪廻転生の四季がある都会の姿は貼り絵のようだ
森本 元昭

「輪廻転生」とは迷いの世界で何度も生まれ変わる事。三島由紀夫は「七生報国」と書いた鉢巻を締めて死んだ。自然の移り変わりは全て輪廻転生、四季はその形の一つとは奥の深い言葉。田舎の自然、そこに住む人間も含めてその摂理は曲げられない。しかし都会は違う。それは人工の世界、貼り絵の世界だと言う。年末風が強い夜、東京駅のビルの谷間から美しい満月を見た。しかしそれは貼り絵の様に確かに私にも見えた。

ゆっくりと急がず焦らず泳ぎゆく魚に変身無の舜もあり
浅見 時子

「舜」は「瞬」の事であろう。私も池の鯉を見ながら、その無為の姿がうらやましくもあり、悲しくもある気持によくとられる。あるいはこれが人間の姿なのかもしれないと思う事もある。しかも昨今の鯉は生まれながらにして価値に違いがある。それも人間的だ。複雑化し戯画化した現代社会、どれ程の人が仮面を持たずに生きて行けよう。生きる為の仮面こそあるいは人間的なのではあるまいか。拔芳歌のように、瞬の間でも変身の思いが持てる人を幸せと私は思う。

丹念に糸底までも洗ひおく夫婦湯呑に途切れぬ絆

岩橋千代子

前の歌に「こもりゐて話すことなきひとり居のたまの会話は言葉につまる」とあるので、作者は夫を亡くして今は一人で住んでいる事が分かる。それだけに夫婦湯呑、おそらくそれは夫と二人で長い間使ったのもであろう。それを今も二つ、糸底までも丹念に洗うと言う。「糸底」とは茶碗の裏の高台の中の事。そこまでも丹念に洗うからこそその二人の太い絆。死ぬまで作者と共にある絆。人間の情の底は計り知れない。

文語で短歌を詠む人のために (十四)

奥田 清

〔四〕過去の助動詞

(4) き

過去 (た)

夏の闇に手探るやうに風を待ち翼となれる刻を信じき
沼の辺の木橋をひらり越えゆきし風の童子は色を持たざる
寂しさの不安を母は包みしか風呂敷に解く五冊の日記

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接統
き	(せ)	○	き	し	しか	○	用言の連用形に カ―サ変特殊

※未然形「せ」は、「せば」の形で用いられて、「もし……であつたとすれば」という反実仮想の意を表わす。そしてこの場合、文末には「まし」が用いられて、「…せば……まし」という文型になることが多い。

世の中に絶えて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし
(古今集、春上) (世の中に桜というものが全然なかったとしたら《花咲き花散るにつけ気をもむことなく》春の人の心はさぞのんびりしたものであらう。)

※カ変・サ変の動詞に対しては、次のように変則的な接続をする。特に注意する必要がある。

(5) けり

(1) 過去 (た・たとさ)

昔、男ありけり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。

(2) 詠嘆 (……たなあ、……ことよ)

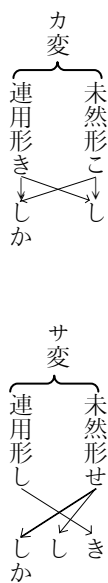
熊肉を父は焼き呉れ生活の知恵教へけり雪降る夕べ
待ちまちし義母の箆の届きけり 飛驒より甥の運びてくるる

※「けり」の用例を探して、かなりの歌にあたってみたが短歌に詠まれた「けり」は、単純に「過去」と読みとれず、「けるかも調」の詠嘆を多く感じた。

※過去の助動詞の「き」と「けり」の違いでよく説かれるのは、「き」は、自分が過去において直接体験した出来事を回想して述べる場合に用いられる。(直接体験)「けり」は現在において間接的に知った過去の出来事を回想して述べる場合に用いられる(間接体験)というので、この性格上から「けり」が短歌に詠まれた場合、詠嘆味が付加されるのではないか。

活用はラ変型

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接統
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○	活用語の連用形



歌帖余白（七十四） — 編集雜記 —

松岡 三夫

文はひとりなり

この人口に膾炙された名言は、高山樗牛が田中智学の影響で研究した日蓮上人を評した言葉と言われています。

筆者が長く勤めていた学園の初代学長丹羽保次郎は、ファクシミリーの発明者で文化勲章も受章した高名な科学技術者ですが「技術は人なり」という言葉を遺しています。松下幸之助なら「経営は人なり」と言うでしょう。この種の言い換えは枚挙に暇なしでしょう。

実はこの基になっているのは、おそらくフランスの博物学者ビュフォン（一七〇七〜一七八六）の言葉。フランス語では、“Le style est l'homme” 英語では“The style is the man(himself)”（文は書き手自身）です。

翻訳家の山岡朋子によれば、その意は「文章とは人間の活動そのものであり、人が思考の中に配置する秩序と運動に他ならないから、盗まれたり持ち去られたりするものではない」とのことです。

高山樗牛が、「日蓮上人の文は、文に非ずして精神なり」と喝破したのも、この意と考えます。一九〇二年に三二歳で死去した高山樗牛は、一八七一年二月二八日に現在の山形県鶴岡市に生まれます。一八九三年東京大学に入学、土井晩翠等が級友。一八九四年、読売新聞の懸賞小説に、「やがて来

む寿永の秋の衰れ、治承の春の楽しみに知る由もなく、六歳むとせの後に昔の夢を辿りて直衣の袖を絞りし人々には、今宵の飲曾も中々に忘れられぬ思寝の涙なるべし」とはじまる『滝口入道』（『平家物語』から題材を取ったもの）が入選、新聞掲載されます。滅びの美学、美意識をもっていて、平家びいきだった樗牛はその滅亡ぶりに「心往くばかり床し」と書きま

す。樗牛自身が病弱であったため、ニーチェの説く超人や日蓮といった強者に憧れる一方、滅びへの傾斜が見られ、まさしく自ら文は人なりであったといえます。

「文は人なり」の意味は奥深い。文字通りに解釈すれば、文章は個人の人格のあらわれです。しかし、天性のものと受け取れます。その両方ともとれます。更に、「文は人なり」かの問題もあります。その逆説も成り立ちそうであると佐々克明は言います。樗牛が「文にあらずして精神なり」というのは、文の巧拙は二の次ぎ、精神の質が大切とも言っているのだから「人は文なり」に近いというわけです。

さて、「短歌は人なり」です。短歌が、人間の活動そのものであり、人が思考の中に配置する秩序と運動に他ならないとすれば、盗んだり盗まれたり、持ち去ったり持ち去られたりするものではなさそうです。人は短歌でもあるわけです。よくよく心して作歌すべきであると考えます。

— 小生の詩（短歌）は、即ち小生の詩（短歌）に御座候ふ

与謝野鉄幹『東西南北』自序

作歌の目・作歌の技法(第六十一回)

作歌の技法(中級編)

三木 勝

短歌を作るにあたって、重要なことは、短歌の形式の五七五七七の定型を遵守することと、もうひとつは、己の感動を読むことの、このふたつであった。

この段階を踏まえて、次の段階で考えるべきことは、短歌の構造であった。短歌は、起承転結でできている。起承転結の構造を踏まえ、一首の中に、ある物語を作っていく。次に大切なことは、感動を的確に表現することであった。感動を的確に表現するためには、表現しようとしている感動とは何かを自覚すること。そしてその感動をいつでも捕捉する事ができる感覚を研ぎ澄ませていくことであった。

定型を守ること、感動を的確に表現できる言葉を探すことが、短歌における基本的な技法である。定型に収めようとする、的確な表現としての語彙を探すことによって、無駄な語彙は、自然と淘汰されていく。無駄な語彙を淘汰していくということは、感動の核心に迫ることであり、感動の核心を探し出すという作業に通じる。

感動の核心を探すという作業は、己の心を旅するということである。感動の核心を探し続ける旅は、自ずと自分の心を旅することとなる。作歌とは、自分の心を旅することである。作歌とは、歌それ自身から、作者それ自身が、自分の心を旅

することを自ずと強制させられることなのである。このことに自覚的であることは、歌を作るうえで、その素材を探すとき、いろいろな示唆・視点を与えてくれるであらう。自覚は、歌の技法のひとつである。

先ずは、感動したことを読むべきである。感動するための感性の幅を拡大していくことに、自覚的であるべきである。惹かれる事象は、積極的に読むべきである。惹かれる事象の核心に到るまで読み続けるべきである。核心に到るまで読み続ける行為は、語彙を探す旅でもある。語彙を探す旅は、自分の感性が感じていることを描く道具を探す旅なのである。語彙は、絵具と同じように道具なのである。語彙を探し続け、語彙によって、感じたことを、惹かれたことを描き出す。歌を作るということは、このことである。語彙を探すということは、自分の心象をあるいは感じた状態を的確に伝えられる状態に製品としての歌を整えることである。

歌を製品として外在化させ、作者の体の外に置くということとは、歌をひとつの製品・作品として、現わすということである。作歌とは、歌を現わすことである。歌によって、心を読み、心を表わし、心を現わす。短歌は、人の心の感動を外在化させ、それを現わす。短歌とは、この世に感動を物として出現させる道具である。この道具によって、死して虎が皮を残すように、作者は死してなお、感動を・人の心をこの世に残し続けることができるのである。

私たちは、このように感動を外在化させ、死してなおも感動が生き続けている歌を読まなくてはならない。

では、実際の作品から作歌の技法について考えてみよう。

①小児科の順番待ちには車にてポケベル持たされ待機をしおり

伊藤モト

短歌の起承転結の構造からすると、感動の焦点は「待機をしおり」となるが、この場合「待機」をしていることが、感動・情が動いていることの核心とは思えない。「小児科の順番待ちのポケベルの音を待ちみて熱の下がらず」とし、いまの気持ちの焦点が、小児・子の様態にあることを描くべきである。小児・子の様態への関心こそが、この場合の感動の核心なのである。この歌の場合もそうであるが、この作者の歌には、起承転結の起承の領域で終わっている歌が散見される。短歌における起承は、叙事である。起承の叙事の後、転結で作者の感情・情感を提示しなくてはならない。転結で作者の感情・情感を提示することによって、歌は歌となる。起承の叙事で終わるのは、俳句である。この俳句と短歌の違いに自覚的であるべきである。この作者の「除草剤幾分利いたか雑草の枯れ始めたる駐車場なり」「子供らの声など聞かぬ公園の草刈りをする作業服の人」なども、感動の切っ掛けの叙事で終わっているのである。この感動の切っ掛けの叙事を土台とし、作者の感情・情感を転結として七七で提示しなくてはならない。この作者の「突然に顔を赤らめ泣きじゃくる色々模索頭の体操」では「色々模索」は転であり、「頭の体操」では作者の赤子への愛情・生育への願いが透けて見え、作者の感動が見えるのである。

②認知症笑顔で応ゆる親子あり我が心まで温かくなる

狐塚秀子

この作者は、優しい。だが「誰ひとり我を信じるものをらず夫が身近な刺客となりぬ」の様な鋭い決り方もしてみせる。この二首の間には「人間はこの世の中で残酷で愛しきものと我は信じる」の世界がある。「心温まる」世界から「刺客」の世界までの往還。この為には語彙の正確さが必要。「隔たりも掟さえない深海の魚のように泳いでみたい」とあるが、深海の魚にも掟はある。語彙は正確に。語彙の正確さは歌に命を与える。この作者は優しい故に人の心の隙間を捉える事に鋭い。この鋭さは時には耐えがたい苦痛を作者にもたらす。だが語彙の正確さに拘る事は精神に健全な強さをもたらす。短歌にはその力がある。なぜなら語彙の正確さは作者に感動の核心を把握させ、感動の核心の把握は人間の本質の一端を作者に開示して見せるからである。この作者の優しさが堂堂と無敵に飛翔する日を。

③過ぎ来しの茶箱のセーターバツサリと過去の整理と吾の終章

手塚ミツエ

「終章」の決意が良い。この作者は具象を良く読み込む。

④連休明け経理課勤務の娘の帰り時計の針は十一時指す

飯塚裕子

「経理課勤務」「娘」の叙事・起承が「時計の十一時」に説得性を持たせ、親の愛情が見える。

⑤こころよき旅の疲れに深々と身を置きてゆく最終列車

松木昭子

最終列車に旅の終りの暗示があり、充足感が伝ってくる。

歌会報告

本部歌会 12月例会(第359回) (山名記)

日時 12月12日(土) 13時〜16時40分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 原田 寛同人

出席 27名 出詠 31首

今回は今年最後の歌会、そして太陽の舟30号出版の記念すべき本部歌会。代表より阿部先生の「感傷を超えて動ける上海の市場に人買いの如き舟ゆく」の歌の解説や、この太陽の舟の歌会が30年も続いてきたことへの感慨を色々と面白くお話しされました。高崎代表や、原田同人がまだ30才くらいであつたそうで、まことに微笑ましくも若々しい光景が目に見え、驚かしました。

平成二十二年の新年会は創刊三十周年。三百号達成記念と銘打って一月九日(土)に開催と事務局より連絡がありました。

高得点歌

・佐渡の海の巖打ちうつ白波の身を砕きつつ冬を呼ぶなり

山名 恒子

渋谷支部 支部長/志賀 倭子 (中村記)

日時 12月12日(土) 10時〜12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 中村 陽子

出席 8名 出詠 8首

・ひとさじのカレーの辛さ秋深み程よき速さ雲うごきゆく

生稲 進

上句と下句の事柄の唐突さが読むほどに「程よき」という言葉にミックスされて一首の雰囲気引き出され面白い歌になったと一同納得、ひとつの言葉の大切さを教えられ、言葉は生きものの感を深くしました。

今月は12月号武田・中村の七首詠について意見交換、一月の支部歌会について希望等話合いました。

大田支部 支部長/庄司 久恵 (河口記)

日時 12月14日(月)

場所 大森山王高齢者センター

司会 河口 礼子

出席 10名 出詠 9首

忘年会を兼ねて歌会を行いました。川村さんの歌「夕早しバス待ちある間にいろ増せる三か月アパートの五階に入る」を皆で検討「夕早しバス待ちある間に三日月のいろ増しアパートの五階に入る」となりました。

千葉支部 支部長/原田 寛 (八代記)

日時 11月21日(土) 13時30分〜16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森 五貴雄

出席 14名 出詠 17首

歌会は和やかな雰囲気の中に緊張感のある充実した時間を送りました。

高得点歌です。

・太陽のひっそり沈む秋の暮れ浄土ゆめ見つ老い一人立つ

吉田 昌夫

死を受け入れる覚悟が出来ている。一人立つに作者の強さが表われていますの批評でした。

添削後

——浄土ゆめ見つつ老い一人佇つ

・「お空見て」幼なの声と写メールの届き見上ぐる七色の橋

渡辺 幸子

・初めての高熱出した娘の頬の大粒涙いとしく拭う

鈴木 愛美

・黄金色の公孫樹並木を渡る風奏でるごとく葉を散らしゆく

上田やい子

水戸支部 支部長／長須 正文

日時 12月13日(日) 13時～16時

(塩田記)

場所 びよんど(男女センター)

出席 8名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

8名が集まり熱心な歌会となった。ミニ講義は鈴木幸輔の歌でした。「長風」主宰者で歌風は現実を見つめた清澄性の特徴があると言われる。続く歌会ではともすれば観念的になる表現を写実的にと。次の如く。

・数日の冷えに応へて満天星の衣裳替へする紅葉の鮮やか

添削↓は

岩橋

水戸支部 支部長／長須 正文

(塩田記)

日時 12月20日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 5名 出詠 10首

司会 深谷 充代

急に寒くなり調子のわるい人が続出。身体をなだめなだめ岩間に集合し、それなりの成果がありました。歌会の後、東京での新年会に行く人が増え皆でよろこびました。

・晩秋の日ザシやさしく広がりに雀が数羽草の実つつく

鶴来けい子

自然体がなかなか良いと評されました。

全体的に結句がまとまって来たとの評をいただく。

柏支部 支部長／末次 房江

(塚本記)

日時 12月18日(金) 12時～15時

場所 アミューゼ柏

出席 11名 22首

司会 塚本 正子

今年最後の歌会、遠くから山名恒子さんの御出席、支部全員の顔が揃った中で始まりました。歌評も活発で、和やかな熱気のある会でした。

・一雫のバルサミコ酢の香り立ち今朝はサラダが地中海となる石塚 立子

・みどり濃き草ほととぎす翔べぬ日々重なる吾のほとりにぞ咲く

末次 房江